



ヤ 4
1442
2



74
7442
2

斯篤魯默兒砲癘論卷二



佐倉 佐藤舜海尚中 重譯



砲傷骨各論

面裏諸骨砲傷

○面裏諸骨の砲傷ハ續發症を起す事少く砲丸の鼻骨を破り或ハ鼻根を左右に打貫き其の尋常の骨傷とハ異なりて腦症を起さるもの多し僅の破骨放まて速に治るそのを見しり又

包裏命 卷二 齊民要術

91-2075

下顎の側より打入りて斜に鼻内を過りノ頰洞を両ちのら貫きそ他側の頰より出てたに續發症を起さるるその所り又上顎を前より打込み耳の邊より出けりそ傷側の面神経麻痺損傷すノを暫く残すのこにて全治せし者あり又頰洞に打入りて其九軟骨聽道を通り内行頰動脈を傷ひて出けるに第八日の夜に入りて砲丸の入路と破まし耳より甚しく血出りり立所に頰動脈を綁紮しり初ハ面神経全く麻痺しつとそ追々復して終りハ全く治せる者あり

又斜に後より打込み砲丸上顎骨を碎き鼻内を通りて頰内の一穴を穿ちて出るるを創を拭ひて縫合せ既に癒けるに破骨鼻より出るる者とあり又上顎を打崩して五齒を破り者ハ口と鼻とに通する孔を遺さずして速に治せるものあり又頰洞に止り砲丸の續症を起さずして外創速に癒え程過さず宜しき所を割開き基石の如く扁平にまき者を取り出せりあり

脊柱骨砲傷

○脊柱骨の横枝を傷ふハ數多しされと脊髓の震

撞症と劇しく續發症を起す事を見ずを推體を傷ふそのハ危し一士頸推弟五六の交節を打破らば初日より下支の麻痺を顯す續て臂の麻木を生し第四日に至りて死せり又一傷者斜頸筋の外邊より打入すれ丸にて頸推と臂の神經叢とを破り其手麻木して殆ど神經叢を斷裂せし者の如くありし次第に知覺運動復つて平治せり又一傷者の膈神經を破り者あり六日に至りて喘息劇しく起り恰も肺を破り者に似たり坐す處の外ハ身を置くに所な

し又頸推を破りて四月を歴るの後に至りて頸太極強梗して是を動せを必ず劇しく痛を覺ゆる者あり是等の傷者ハ皆脊推骨の一片を打破らば者あり頸推弟四五の交節の所を側より劇しく打たれ其處に仆出り者あり初ハ傷邊に麻痺を起して尋て四支悉く麻木し昏睡して死せり皆脊と腦の焮衝の蔓延によるなり治法ハ其初に防焮方急るべし

○腰推弟三四の交節の所より打入すれ砲丸其所より嵌入して已に廿五日を歴る者を療せり始ハ著

しき病症もあつてに依り痛を發し遂に其痛に堪へずあり謔語を引出し破傷風の如く痙攣を兼ふり是必死の症にて砲丸を取出せども諸症愈ゆつと覺えぬと先創口を切廣けへッボーム名器を用ゐるに丸は容易く取出しつと果して遂に死せり其創口は指を挿入しハ髓中にまゝ届きぬ屍を解きて見ると脊髓焮衝せり

○面裏諸骨の傷ハ都て危き事あり只其傷頭蓋底骨と脊骨の頸椎とにある者ハ極めて危しとす

猶本篇頭創篇他日譯述に委しく論じたり
以下顎骨砲傷

○此傷ハ尤も多く奇怪のありはまを存せぬと
○砲丸多くハ下顎骨の一側より入りて其所を碎き入路は對する他側より出るあり予の曾て見ゆり傷者の奇怪ある者一二を擧げん下顎の齧齒二本を残して其他の齒を悉く打破り又榴彈丸は中上下顎の齒を打脱せし者あり又下顎の大齒の生る所を共ニ打脱せし者あり又下顎の

一側を碎さて入て去れに對する他側の頰上よ
 出より一者あり又顎骨の咬筋の根着する所
 を打破て丸ハ直ちにそけ出する者ありける
 に口の開閉自在にて折れし所も滑脱せされ
 皆折骨とハ思ハゆりよ予の診し時ハ八日めに
 て其骨の折れし處を診斷せり

○治方ハ甚ハ簡易あり齒牙破骨の故まじきもの
 を取出し其餘ハ化膿して自ら放るを待てし
 切斷方も益なくまじき繃帶にも及たれ第一の主
 治ある事ハ口を嗽くにあり初ハ冷水を用ゐる二

三日の後にハ微温湯に換ふて數々嗽らされ
 ハ口中の膿汁胃中に下りて腸胃症を顯し甚
 しきハチビス症を誘引す是予の親しく見る所
 あり速にホロール水にて嗽けを忽ち治すべし
 故に初より含嗽方を行ふ者ハ此憂曾てあり
 豈緊要の方にあらずめ且獨に砲傷の容易く治
 するのこたはらむ治後の醜形を減すべし予の
 治療の間醜形を遺すもの僅に二人あり其一人
 ハ骨の裂間ハ靱質の物を作り成して終に骨に
 化し生骨の骨端を愈合せり是ハ初より予の療

石丸論 卷二 七 瀧淵米舎赤木

の的當あらはるるを戒めければ醫士予に語つたに
傷者ハ必ず出血のよめに死すべしといつて果
して其言の如く第四日に至り急に血を吐き
死せり其屍を解さしに内行頸静脈ハ小破骨入
て其傷所より出血せし者あり第二人ハ一將士
あり砲丸を下顎の右側咬筋根着す處前より打入
られ舌下を通りて下顎の左側斜頸筋の内縁喉
頭ハ當る所に止まれり初ハ纜ハ是を擦り得一
けきと醫士直ちに其外表を割開きて是を抜去
るちとハあしうをちんと決しければ遂にハ砲

丸の在所知せずありより別て苦痛の状もなく
只昏鬱するもの廿二三日を歴て右脇の胸膜ハ
炊衝を生じて去れのため死せり屍を解くに
左の斜頸筋の後ろに膿瘡を造り打入すれり砲
丸ハ扁平くありて脊椎骨に接き瘡内は止まら
ず内行頸静脈ハ砲丸のよめに上より下に向ひ
て五分許りの裂紋ありしと外層より傷所を
包み已に愈合ひて其半徑を減せり然もとて若
初に砲丸を抜たらしむるハ出血の恐もありて又
静脈中は空氣吸入せられて危険症を引出すも亦

包裏論 卷二 一 齊尺青舎藏及

計らへらりき是に應ずる醫士のたぐちに砲丸
 を抜らざるも宜かりけり第三人をセ子マルカ
 人よりフレデリカ^{名地}の戦より下顎の左角を打
 たれ其所已に腫しゆ急砲丸の在所志を口内
 探するに顎角の上邊數片に碎けしり第四
 日に至りて動脈血噴きしり口内より栓塞法
 を行ひて一時の急を凌りしり尋ひて頸動脈を
 綁紮し其後四日を歴て再び出血せりたぐに
 静脈血ちり口内より破骨を去り砲丸を取出
 出せしりえ兩三日の間ハ血出さりけれとを復

ひ發りて寒戦を起し終に死せり屍を解きしに
 膿毒症の外顎骨碎けて瑕裂骨頭より及つて
 骨傷より出血ハ常の事なり其出来る
 理を審らに知りて頸動脈を綁紮す法に代
 つて顎骨の一部を鋸で断つ者ありし膿毒症
 と出血とを防ぐに其命を救ふに至らば

髑骨砲傷

○此傷ハ甚危し只髑骨の上縁に砲丸を受けて他
 所及さるるものも危し然らず焮衝程より起
 りて化膿多しらす破骨漸く放きて経過順なり

砲丸論
卷二
流瀉料

曾て一傷者を見り砲丸其膀胱前上棘の邊に
打入りて横骨の横枝を擦過り者あれば容
易く治せりおとを髑骨の邊に中る砲丸は深
らゆと亦是を抜き取りて腎肉より厚く被
られし所の膀胱を破れハ其一大片を粉砕し或
る者創口を深く割開けとも砲丸の到る所を知
りて砲丸惡汁の泄路を塞ぎて痛を劇しく
息む時多く傷所は惡膿を醸し膿毒症を以て死
をり死して後其屍を解きて見せハ膿毒病の外
傷骨廣く骨衣より放血を混ぜて稀汁を夥し

く其離間を齎蓄するものあり膀胱中央に嵌
せ砲丸を螺丸針キルク抜の事ありはて抜
きとり死症を救ひけりを僅に一人あり坐骨を
碎りて者も危し砲丸坐骨を傳りて大腿骨
を擦下すれらり命ある間ハ見過りて屍を解
きて初て砲丸を認るをり坐骨外枝を打破られ
て死骨の大片を抜き救ひし事あり凡そ坐骨
傷ハ危症を引出し化膿永くして虚熱を發す
者あり

○力ある防炊方を専ら行ふべし凡そ多肉の所ハ

包裏命 卷二 腎丸

異物砲丸衣片の類潜匿し化膿ハ古れのため起る
ある一防炊方ハ是を散すに至らざれば其勢
を殺さず蔓延蔓延らざしめ異物を漸く脱下せ
しむる者あり世人防炊方を怠るハ不幸と云へ
其他痛ありハ阿片を與へ膿毒症顯るハ水
銀劑を行ふ一

鎖骨砲傷

○鎖骨ハ貴要の器心肺大血脈の類に近ければ思ひの外危き處と少く予此骨の砲丸を受けず單へに折る者よりハ大片を粉の如くに碎さけ

種々の砲傷を見し中にて鎖骨肩骨相交る所より鳥啄突起突起を碎けし者を見し又鎖骨肩骨の交會の所を粉の如くに碎き且其所の皮肉をハ一掌大許も急ぎ去り鎖骨の斷端一寸をさし開き上に向ひ張ければ遂に治し斷端相接住相接住り醜形を殘さず者を見し治法ハ頗る簡易なり臂を軀に當りて固住し創上は寒菴方を行ひ化膿す所の後油を蘸せし綿撒糸を貼す破骨ハ化膿によらず全く放るるを待て取去るし肩骨は接する所を二寸

許も失つる者ふに新の骨質を造り出して其不足を補ひ治後短縮を残さざるものあり

○鎖骨の傷者死する者二人あり其一人を記す鎖骨の中央を折りて其尖端後ると上とにむらひ肉を撞き破り臂の神経叢はよく届き初折骨を整つゆらる故は両臂の痛に堪つらる指先を僅に揺すのこゝろて運動ハ失るゝ予の診ありハ弟八日ありき其頃ハ已に大熱寒戦を發したり予直ちに其創口を割開きて斷骨の折端を肉中より拔出し其端の尖あり所を鋸で斷ち

折骨の兩に斷口の間隙一寸許あり術を施せ
端に行ふに後兩三日を歴て遂に死せり屍を解きて臂神經の傷ひし事を證せり予嘗て両手に痛ありて少しも動らぬと能はざりければ病脊髄にまぐ及ひしそのと思ひしに頸椎の邊にも激衝の状ハなかりけを此傷者ハ立とてらる創口を割開きて折骨を整のこゝろを死をよめられぬ
うをに惜む

○鎖骨傷ハ初に外科術を用りて破骨を去り又ハ骨の折まり所を鋸で斷つべき症顯る者に

あらしめるの外、總て待効法を主として是に應
し其経過を自然に任するを良とす

肩胛骨砲傷

○肩胛骨ハ砲丸にて真向或ハ脇側より傷く
のこあらは前より大胸筋を打貫きて腋窩を通
り肩胛骨を傷きふとあり就中其奇なる者ハ
砲丸を肘較交節の上邊に内側に打入れ血脉
にそいて外り肩胛骨の下角を傷ひ肩胛骨と脊
椎骨の間より出くもあり都て肩胛骨傷ハ危
らも只瑕裂の肩較に及つる者のこ危し初より

肩較に焮衝劇しく起りて却て腫ます又押せと
も痛くを増さん創内に惡膿を醸し膿毒にて死
せり瑕裂ハ監定しらく又肩胛骨の碎片探指
に觸るるといひとそ瑕裂の肩胛に及つるハ確
断しうき者有り故に此疑ひあるものにハ防
焮方を厳しく行ふべし但し創口を割開けを空
氣入りて傷面に觸るやきき者あるハ暫く見合
すべし若し異物を取去るべしにあらば其病
症の経過を見て肩較を傷ひさふ事を明らに
知る後にあらばれハ割開くべし若し若肩胛の

下部を傷ふ者、膿の低き所に垂まて瘡を造
る。此とある意を注めて肩胛の下を廣背筋より
深く數寸割りて膿を漏らす。大抵砲創を開き
ハ無益とあるを、一傷者砲丸を前より受て
大胸筋を貫き肩胛下窩の筋内に止りし初め
血を吐き胸膜焮衝の状を顯る。此の何所の
の病あるかを正しく指をたし能く膿汁肩
胛下窩筋の裡に聚りければ其下を廣く割り
に砲丸と破骨肩胛骨の膿と共に漏出さす。遂に全
く治せり。又一傷士肩胛骨の下窩を後ろより打

抜る。此の砲丸ハ肩胛裡筋の内より出るもの
あり。予指を砲創に挿せを俄然とて痙攣起り
指を拮搦しめくして急に抜く。つらければ暫く猶豫
して遂にハ抜得たり。即ち瑕裂遠き所まで及ひ
立とらるに砲丸を抜去る。此ハ惡しあるを
ハ四五日を歴て是を取出たり。即ち丸ハ扁平に
あり。頭て膿毒を病みて死たり。屍を解きて見
るに瑕裂果して肩較に及ひたり。抑々圓錐を用
いて肩胛骨を穿ち砲丸を早く取出すの法ハ命
を救ふの術にあらす。砲傷肩較に近ければ瑕裂

彌々すに及ふとり事の疑ひハんるるの
らす

上臂骨砲傷

○上臂骨の骨傷を別て二段とす一ハ骨頭にあり一ハ骨體にあり肩較と交る上臂骨頭の砲傷ハ數多し前後内外より傷る其内方より打入す丸ハ鳥啄突起に接して腋窩より骨頭に中るなり大抵脉管と神経とハ免る障りあり其外方より打入す丸ハ多ハ三角筋の一部を傷ひて交節に至るとも交較をハ破りて

開くはるもの多し指はて探さとも初ハ傷の交較に及ふと及んば處を別ちり一時過て交較焮衝するに至りて知らるるはれとも此辨別ハ治法を取る極めて緊要の事ならん両方より防焮方主治る其上單膜の破裂した別に治法を設けされハなり治法よりけれを化膿永く續くといへと交較の強直を遺して治す一ハ化膿のよめに命を殞す一ハ骨頭の鋸を斷つ一ハ砲丸の前より入る或ハ後より入り者ハ共に骨頭を碎きて數片とあり其

石... 卷... 四... 濟... 骨... 筋...

上罅隙を生ずるものあり或ハ骨頭を凹ます者
あや或ハ骨頭に嵌留する者あや創新しければ
指を挿入して探り又ハ外より擦りて傷むる所
の廣狹を識るは只皮肉爛れざる者と已
腫る者ハ骨の凹し所を見あやまり事あ
る者ハ凹し者の瑕裂を兼て已に骨頭に及べ
ければ直ちに其所を鋸断つて若し猶豫して
其術を行わず化膿によりて碎骨放るを待ち
是を取出して治むれば必も交較の強直を遺す

あり凡そ傷後立とくんに骨頭を鋸断てハ愈
て後交較を全ふするのゆゑに是を化膿後に行
ふに勝まりとす交骨傷の危きハ外の方より打
入らん丸の骨頭を貫き其勢ひ餘る者よ
り過るをあり或ハ胸の裡に届り或ハ肩胛骨
を碎きて其上下の窩内に止るありあはをり
其碎けし所の廣き狭きハ知れり者るれん
先つ防炊方を以て是に應じ病機の動き出るを
待つて肩胛骨を廣く傷む者ハ骨頭を断
ちしに其驗なく遂に細脉出血を發して死せ

包... 命... 卷... 一... 上... 齊... 足... 精... 金... 藏... 反...

石部論 卷二 廿五

一を視より故に待効方を善とす化膿生すの
後鋸を断ちても晩にあらす

○腋窩より上に向て交較を打破らる者亦重傷
なり割口より其内の状を知るを肝要とす一傷
士の招に應ずる醫士此を探りて肋骨を傷ひ
者なりと認め予に告より十二日又至りて出
血を發しぬ鎖骨下動脈を綁紮す一ハ一旦ハ
効あをけれ共血再ひ出て終に死より屍を解
きて觀るは肩胛骨の外縁より較内を破り骨
頭を碎きたり此傷ハ初骨頭を鋸を断ちて且

肩胛骨の碎片を取て去らるを全く治すは
と察しぬ外方より打入すれ九ちらる肩胛骨
を碎きて心かくの如きの甚しきにハ至らす
○上臂骨體の砲傷ハ下に向て瑕裂をいしらす
いはにこれれを體の質ハ脆くして裂けやま
頭の質ハ海綿のまじりて裂けりしければ
ア只頭と體との間ハ中より瑕裂を上にい
する骨頭に近き體の砲傷をさうらうら
骨頭を鋸を断つてさす又遠く下方に及
破骨も容易に鋸を剪つてさす動もすれを數

包裏論 卷二 六 齊尺骨合載反

月を歴ても猶治せらるる一故に外科術を要と
 する症頭をくく者といつとも自然に任せ去却
 て善き事あり予一傷者の上臂結下一寸半許の
 所を志しつゝめに折し者を自然に任せ置きて治
 しけるを見たり又同所を破りて皮肉も共に爛
 じ骨を包み全ふしつゝさ者ありつるを其所よ
 り鋸を断ちけるに全く治せり然らハラリル^名
 の切除方^{刀をもちて交節より支を}ハ鋸断方^{鋸を}
 支の所を擇む^にに^{支を}復に勝まりといひ詞ハ予
 ハ實とせむ只肩胛より上臂骨頭の間にある

砲傷ハ其交較より断ち放すを善と骨體はあ
 る砲傷はを其所より鋸を断つを良と治後の
 形ち見悪くくらす骨頭をくらすを鋸を断つ術也
 亦施しつゝふにあらず臂骨の両結の間は當る
 皮肉を縦に割開けを二頭筋の長腱頭を是を
 其附ゆる所より放し鉤にせつけ側に倚せ骨
 頭を露くして鋸を断つより去きと其創面より
 滲出つる汁の漏りてハフレテリカ^名地の
 戦の後ハ別に一所を割開きて是を二人に試し
 たり其法ハ肩較の後ろ肩尖に當る所より下に

向ひて半圈状に割開くなり瀝す汁の立と
ろに漏れ盡さず膿瘡を生むるの患なく治する
も速なり然れども此一方ハ要ある一術にて外科
醫の時ニ臨みて用うべきものなり但動もすれ
ハ二頭筋の長腱を傷ひやすし意を注りて行へ
る必ず施すべし

○上臂骨體の遠き所より破裂せる砲傷ハ常に危
し無て皮肉を爛らす者ハ速に鋸で斷つの外術
ありしれど皮肉爛らす丸路のよりて輔肘骨の
脈度正しく運動知覺共に存するものより先づ

保全するの策を試むべし此傷の尤も危きは二
頭筋の内縁に沿ひ血脉の道路に従ひて生ずる
皮肉の焮衝あり防焮方を厳しく行ひ刺絡水蛭
寒罨方よりよに應じ其勢を制するを主治と
す若し是等の方驗しなく焮衝退くされを皮肉
を割開くべし此傷の尤も困難あるハ傷支の位
置あり夾又ハ墊をもて安護すれば身軀を動す
毎に傷支揺れて痛堪へざる者あり故に是を
胸に當て維持するを良とす其法ハ脇肋の臂に
當る所に蠟布を包み厚き墊を置き是

を數頭巾にて胴にまきつけ臂の傷所は去と
さらに厚く撒糸を貼し數頭巾にて給ひ其所を
胴に巻つて墊の上は當て下臂をハ横に季肋
より心窩に向えしめて共に綁住るより更に臂
の後ろにハ其形を應ずる厚紙にて造り夾
を安きて亦胴に綁住るより

○上臂骨の肘較に近き所の傷ハ其折る事の單
一ある者ハ全く治すべし予う療む者ハ傷ハ
上臂骨起近き所は砲丸を受け横はまに折
ると破片をも取て出さずして治しけり又骨

を二寸餘り碎るれ者あをつるを其所許をを
鋸で斷ちしと死む者一人あをけり治法ハ
總て待効方を見をうらひ餘り攻撃の方過
つらす肘較の強直を遺すも治す者あり

肘較砲傷

○此傷を亦少るにあらす殊に戦をけし時ハ
士卒の砲を構へ肘を張つる所を打る者多く
して肉の内は丸の入る者あり隊伍を組する時
も亦此傷ありとすらあらすはれとも其丸肘の
張起の先ハ多くハ至らばあり又肘の肉と

石門言 卷二 十九 濟衆新書 外科

心に入ると筋の層間に傳わり遠く走ると遂に
ハ正肘骨輔肘骨をも傷ふ心のある一傷者肘の
裡面の筋肉を打たれ正肘骨の冠状張起を碎さ
し餘りみく輔肘骨の動脈をも破り四日を歴て
動脈より血の出る止と劇しあるけんを下臂を
鋸で断ちたる是動脈を綁禁するよりらんを
思ふらんれとて預め創口より指をかく探り試す
に骨の夥しく碎けてあるけんを止む事を得す
あるハ施せり又一傷士下臂の内面ら肘較に接
する所を打り者ある付属の醫士出れを療し

けり出血甚しあるけんを已に臂動脈を綁禁
するの外ハ術あらしとて予に議うれ予其已
に腫たりしはまを見て骨の多く碎るぬるを察
せしよを指を挿して探る果して輔肘骨に碎
る一所有けりかく深く思慮をめぐらし診
る者ハすくたふるり乃ち下臂を鋸で断り此
外に下臂を鋸で断ち者三人あるりある肘
較を打碎り其瑕裂の遠く上臂に及ひ者と
肉とを爛りて骨を覆ひ全ふるあるもの
とあり其外歩砲りて肘較を傷ひ者都て廿二

砲夷論 卷二 二十 齊衆新書 外科

石類言 卷二 十一

人皆鋸断術をを行ハさり正肘骨輔肘骨の上
端を傷ふもの多し上臂骨の下端を傷ふもの
ハ稀なり此理を考ふるに肘を張ると曲る時ハ正
肘骨の張起口を開きて上臂骨の下端を合し其
内に藏むるハなり

○肘較の砲傷其鑿定を誤り是を自然と任せぬと
ぬきそ肘較著しく腫れ上臂にまで蔓延し若
上臂骨起を共に傷ひぬれ二頭筋の内縁動脈
の経路に沿ひて其腫殊に甚しく初にを傷所乾
きぬると漸く血の混り汁を流し五六日を

過ぬれ膿を夥しく醸しぬたは是を創口よ
り漏すの事ありす遂にハ單膜のちりこりこりを
穿ち破りて遠く上下の両臂にまで及ひ思ひよ
らばる所に膿瘡を作すぬ一傷者ありたり砲傷
の事必異ありたり人を誤りて他所の傷を認
りて一月餘も過ぎ去りたるに肺中に膿瘡出
来たり傷者膿を吐き虚熱起り疲憊極すぬ
傷いたる一所を鋸き断しと晩またるにや肺
病もたると重なり遂に失せたり故に予ハ肘較
の骨傷ありし事を志すと察しぬる者ハ皆猶

砲夷論 卷二 十一 齊景清書

豫を以て傷む一所を以て鋸を断つ術を行
つて但一交較を開くは肘の外方に行ひ意を
用ゐて肘神経を惜しむ是を傷ハざる一予
撰ひ用うる方ハ正肘骨筋の位置に従ひ皮肉を
縦に割開き更に真横に正肘骨の張起を打過さ
て上臂骨の外起まで割開き三頭筋をも断ちぬ
き其形ち「」の如くなりたる割口より交較開
き露えしむるや猶神経を避つて刀を肘の外
面より進みて骨端に附ぬる肉を放し其全
く放さるる時先づ碎けし骨片を去る一若し

破骨の生肉に着きぬる所あれば刀を其着き
ぬる所より剥き取去る方ありコルハルの剪
は正肘骨端に碎くる者といへども其並つる
所の輔肘骨をも合せて鋸を断つ一但一正肘
骨頭の傷ハ遠く下方に及ばざるそのをれを
若輔肘骨の頭を過るも頸に當る所の際より下
にてを鋸を断つ一凡そ骨端より三寸餘 輔肘
骨者ハ其所の際にての所多し多し 輔肘
骨を合せて共に真横に鋸を断つ一是甚し施
しつて其術を正しく其術を行ひ得ざる奇なる

砲夷論 卷二 正三齊史書載反

又々るあやをいよにて創口歛て傷支助を命め
 てたよりや々々後たよりも較節の強直ともしつりす
 又交較をも出来のりつりつりつりつりつりつりつり
 予も亦かく傷支を惜しく骨の一部のりを鋸
 き捨てつりつり全くつりつりつりつりつりつりつり
 露るとも知らしりつりつりつりつりつりつりつりつり
 術より証しめりつりつりつりつりつりつりつりつり
 新し骨を作し出し復ひ舊の姿よりつりつりつりつり
 輔肘骨の頸より下の碎り者其破骨一片を
 是を是を抜き去りつりつり又粉の如く碎り者そ

鋸を削りて傷面を平らにたすつり必ず正肘骨
 を合せて同所より鋸を断つつりつりつりつりつりつり
 一所を鋸を捨て足をとりつりつりつりつりつりつり
 くれハ愈るのみ又愈ゆるの後も運動を妨ぐれを
 たり抑々肘較の石のつりつりつりつりつりつりつり
 ゆえくれをたすつりつりつりつりつりつりつりつり
 ○正輔兩肘骨の破片を鋸を捨てつりつりつりつりつり
 するの後に上臂骨の下端の碎りつりつりつりつりつり
 をも鋸を去るたりつりつりつりつりつりつりつりつり
 たりつりつり者多し若し只其軟骨の傷を其所を

石刃言 卷二 二四 済病 全 赤木

その以ハ療治中較節を鈍角にいし置し鈍角をきて強直に介るその患ひ尤も少なり若骨を大く断ち去るにそ其骨に着く所の筋肉をゆるく放さしれを術を行ひのし抑々治後交較に運轉の存するを存せしむるとハいふも其理を究めりし者あり骨の大片を鋸き去るも交較を存する者あり又小片を削り去るも強直を遺すものとあはれによりて見せを強^あち断ち捨てる骨片の大小に係るとも見えを只時のよろしきを見せりし其所を動かさ交較をも

出来し事もあり予を思ひつれとも其病者に永く親まらば不幸なり
○予は数々骨端の一所を鋸き断ち見て彌々砲丸のたりに交較を碎られぬ者ハ自然に任を置しつらすとて識^あめたり
キニドリト名ハ予に異なりて是を自然に任せぬるを善と云つて夫此所の碎骨ハ熟膿の後も較節を廣く割開くにあらば去りし殊に正肘骨の碎片ハいよしく然り正肘骨の冠状張起破るれを正肘骨體に及ぶ長く裂々其

砲丸論 卷二 二五 済病 全 赤木

石 碎片すく、アケ横たせり上臂骨の端上に升る較節を割開々々そ相さ去り、その上、古くあやむる○施術後の處置ハ病所を安置せしむを專要とす其方を夾を木にて造り其めりて綿を志し、そのにあけ其外を蠟布にて包み長きハ上臂の上部より指頭より届くを度とふ、肘較に當る所をを曲々て鈍角の形とふ、上臂骨の内起の當る所もそ四文錢二つり、骨位の孔を穿ちて其起を合せしむ此夾を法の古く當て、條布にて綁住るより早く治するそのすく、くらすとい

つとそ大抵廿一日前後にて治するを常とす又二晝夜の後若くそ熟膿の後此法を行ひても治するそのあや

肘砲傷

○此傷ハ希代より多々ある皆能く治するあり正輔兩肘骨を合せて横に一側より他側より貫き、傷さへそ險症を起さずして治せり只一傷者の切断方を行ひて下臂を去て、者あり其傷ハ下臂の下部粉の如く碎々て輔肘骨動脈を共に破了めれ、血の迸り、つる、古く夥しく、はれ、た

うに虚憊極り且度に適らざるを壓定方を行ひ
せし腕較彌々焮衝して化膿甚しくあり者
あり若し初めに直ちに傷ひ多く動脈を綁
束し腕を全しつるならむと思つ

○又一傷者張起の下三寸計でのくころにあ
正肘骨を傷ひ瑕裂の肘較に及び者あり
やうて化膿し程に輔肘骨頭の邊を廣く
割りて較節を開き膿を漏らし幸に治し
只強直を遺しつるものあり

○又一傷者正肘骨の中央を傷ひて瑕裂其上下に
多し及ひぬ焮衝症盛りて永く止まざり
水蛭の驗し著しく幸に其患を輔肘骨に及
ばず長大の骨片を抜き去りて後ハ程なく治
○治方ハ簡易なり肘較より下指頭に至るまでの
平らな夾を作りて下臂をこれに安置す
綿帶ハ壓迫に過くつゝ初ハ寒罨方次に温
罨方を行ひ化膿減すを見て綿帶を毛布に換
ふれを大効あり破骨片ハ化膿によりて生骨
に放るを待ちて取り去る

腕較砲傷

砲傷論 卷三 二

○輔肘骨或ハ正肘骨を碎き兼めて交較を打破る
 もれあり又腕根前列骨を貫き破りて交較に及
 ぶものあり又砲丸正邪の二道より交較を通り
 正輔兩肘骨と腕根の前列骨とを合せて碎く者
 あり此傷より起る險症を傷後の焮衝より焮衝
 の生ずる所ハ交節と腕根骨より其患を全身に
 及びりやもすれば膿毒病を引出し易しやく
 焮衝の劇しく起る理を尋めんに腕較ハ堅き靱
 帶多く聯りて其を輪靱帶より腕根に束めて焮
 衝を著しく拒みぬるにやもすれば劇痛すしく

進み焮衝よりより亢より膿を醸して後初て其
 所の筋肉と靱帶少しく弛むものあり凡そ膿を
 醸する所同一よりされとも多くを拇指と示指
 との間又ハ腕較の両側にあり又骨の海綿質中
 へ膿を醸するものありて忽ち膿毒病を引出す事
 あり此症ハ切斷術を行ひても命を救ひしや
 凡そ予の嘗て試みる治法より論すれば腕較
 の砲傷切斷術を要とする者すくありはれとも
 初より焮衝少きときは水蛭を怠り琶布を貼り
 て治方を誤りぬる事あり予ハ直ちに初より瀉

石丸言 卷二 二ノ法身米會亦木

血法を嚴しく行ひ氷片を貼し阿片を與へて炊
衝の勢ひを制し其惡くも轉歸を絶ちぬれハ乃
ち切斷術の無益とするりぬるを屢々證する所を
腕較の砲傷破裂を遠ざけ及ぼしぬる者
にのこ初に切斷術を行ふを善とす

○一傷者腕較を傷ひ其所緊張して纒ふるを
痛之堪らざるは其脈疾小なりて舌乾さ且
謔語しぬるものあやかり予は此を診て療し
腕も助る命をも亦救ひ得しなりと覺え
るれを乃ち傷所の外側より刀を刺して割開き

るに惡症一時に消えぬ又一傷者あやかり緊張
已に弛らぬ時割開きぬるハ其効一時に顯ハ
るるれとて遂に肺瘍より死せり

腕諸骨砲傷

○後腕第二列諸骨の傷ハ第一列の諸骨に比すハ
ハ危ららずはれども治法を誤るに似たりて
目同一ルウエフ名の隊に屬しぬる兵卒魯人
アタリ後腕第二列の諸骨を砲丸より貫き
破られたり是を療しぬるに運轉少く妨々ら
る事多く治せぬるをフレトビユルフ地にある

砲丸論 卷二 二ノ法身米會亦木

予の門生の知る所あり

○前腕諸骨の砲傷ハ一骨衆骨の論をく別て危き
予は予是を療せし一傷者ハ前腕諸骨を悉
横に破り貫きて只拇指の患をのぞき其道に當る所を
碎さん多に其手を全うして治後傷所は碎骨の
跡を遺し纔は短くもりたるものにて恙なく舊
の如く使用に應まり此傷ハ總て切斷術を
行ふ事を禁す

○指の砲傷ハ數多し一指を傷ふものを立とせし
に切除し一治する者と速まりされども衆指

齊しく傷つるものを二晝夜過ぎて切斷せしむ
に炊衝劇しく起り化膿目を経てやまず衆指と
腕と共に強直を遺せしそのありさ予の論ハ戰
場をくを決して指は切斷術を行はず又行り
りせず其炊衝症を避くるものたあさり晩く切斷
ちても亦炊衝起る事とあや但し是のよめに牙
関緊急を發する一人を見す

○腕の諸骨傷ハ總て手まりの物を作らば其安
置し他所より早く帑布を行ひ晩く去るべし
肘傷腕傷ハ浴方を行ひやすきを屢々行ひて

石... 卷二... 三十一

其驗一著

大腿骨砲傷

○大腿骨のうちけくを骨頭骨頸突起の邊を傷ぶ者尤も危しと予診たりし傷者四人あり一人ハ膿毒病より忽ち死せり二人を日を経て同一く膿毒を病みて死せり其一人ハ骨の一所を鋸で断ちぬ砲丸を大突起の前より斜に内に向いて打入せしむるハ傷ひし所も廣く化膿も甚しうて較の窩内も及ひぬらん疑あり乃ち術を行ひて骨傷の下端をハ鋸で断ち其上端ハ骨

頭と共に剔て去るめ此術ハハりしものちすて成りし血の出るちとも亦少なるなりしはれども兩三日を過て膿毒病より死せり屍を解さず觀るに坐骨の一所に砲丸に中て碎るし所あり之を抑此等の所の砲傷ハ傷支を交較より切除くの術と鋸断つ術とハ共に行ふ一あり予ハたゞ一所に鋸断術を行ふを勝せりと信但し此術の無傷の股と屍とに行ひ試みるに難きものを有り故にオツメンハトハ名と議アケ化膿の後を待て此術を施しぬはれざるやすさを勿論

砲集論 卷二 三十一 精舎藏板

の事より其上死におく入て膿毒病をハ免ま
 ちとを證し得まきあり予治療の間纔に三人の
 之奇異の病状ある故より一所の鋸斷術をハ
 行ハさるる都て較節に近き傷ハ自然に任せ置
 まぬれ膿を較節の窩内に醸して必ず死す其
 醸膿の有無ハ誠に診決しあつたそのとす砲丸
 突起の周圍に入ると時ハ傷ハ突起を越えて頸
 頭に及ひぬるとの將も及たはるるを彌々決し
 たり予見たる者ハ皆其瑕裂大ききて單膜
 の内及りて傷さくも較節の窩内に膿を

醸せり傷支短うくありて外の方より回さるハ
 この股骨頸折の本症なれとて予の診たる此
 骨碎りをあつたをたきすは骨の碎片纖維
 質の膜衣して互ひに連絡られ其本位より脱
 するに由るかと疑ふつらざ一傷者あり腿骨
 の頭碎りて膿毒を病きて死しなれとて初より
 股の屈伸自在ありたり又一傷者あり骨破り
 とて幸に相合ひぬれを痛むを少しも覺えず其
 上自在に動いて得て相啗むの聲もあまゆゑ其
 醫士たりしに愈え合ひぬれとて予はハ化膿

甚しうれをさくハさうすと思ひしに終り死
せり其屍を解きて觀るに破骨已に壞死して生
骨と破骨との間ニ薄膜出來て大突起の後ろに
膿瘡を作す其内ニ砲丸を藏めたり

大腿骨中央の砲傷

○諸骨砲傷の内尤も危き症あり其れを昔の軍醫
を悉く鋸斷術を行つて命を救ひ得し者實に
少き是は處をさすの法よりさうす傷者を遠
方に送りて群集する病院へ入るるの罪あり予
千八百四十九年の野戰ニ此傷者を數多く療せ

しに其傷治す所の後ハ歩行をなす得し者殊
に少きなり

○砲丸の骨を碎くちと廣うらす傷面相接する者
又砲丸貫きて骨内ニ止まりさうす者ハ共に治し
易し礮丸に觸るるを腿骨粉のちとくは碎くか
者にて速に其状を診決ししめよとすありあ
り凡そ骨の傷さし所ハ輕く志也やまきまきとも
其碎々しあとの廣狹を察しゆるを至てのたよ
事あり殊に腿を速うに腫れやまき腫れハ彌
々診決ししめり者あり礮丸ニ打まき骨折は肉

破る者と破裂丸の一片擦過^まりて其所の骨碎
 々て皮肉裂々さるゝものとを共に傷支を保つ
 べき望むをすくちよそのなり歩砲丸も腿骨の中
 まで其所を片々に碎さるゝ者ありといふを
 ねりて折るのこぼりて碎片を出さるゝもの
 あり此傷の尤も軽きその、真横^{まよこ}に外方より骨
 を打貫く者あり此症ハ脉管神経を傷め又焮
 衝化膿を起す事少し是傷者を病床に横^{よこ}に卧
 せしむるを惡汁の漏やをなれをなり若砲丸の
 骨を斜りに打貫くものを皮肉を廣く破りて著

しく化膿するに由る凶なり殊に砲傷を腿骨
 の上部に得るを傷支揺さや長く且を焮衝化膿
 静脈焮衝追々増加するにゆゑに大凶と云ふ
 ○都て大腿の砲傷ハ續發の焮衝と化膿の輕重に
 係りて吉凶を占ふ一一尋常の骨折は速に
 折端は新骨を出来りて其所を接合せ合する者
 なり砲傷よりなる骨折はハかゝる事なれば
 もあらざると大抵傷面輒く化膿して壊死し死骨
 剥々去るの後ありてを新骨出来らす化膿久し
 く止らずして折る所揺さぶ頭て化膿減ずれば

とて死骨片のおのつらり出らたふそのよてお
 まを取去るの術も施しつた自然に任せてお
 さめれん數年を経て治せざるもの存り故に
 軍醫ハ専ら切斷術を主張しつた殊に其傷のた
 めに死ぬへつらりしとあるものと遠方へ送り
 やりめしつたそのにを必を此術を行ひし近代に至
 りてを膿毒を病めるといふ患あるとてを知
 ると又切斷術のために起る害も少しありすと
 云ふつらりとも知りぬ抑予に見る所よを悪症を生
 じける者よハ傷支を保ち得つた醫法を試むへ

さつらり將ハ善惡を問はずして皆傷支を切斷つた
 ところ是非孰まにあややつた判断しつたつらりと
 ず但し傷者を遠方に運ひらるるを極つて禁すた
 く擔ふて近きところの屋よ入是其所よて療治
 しめらるるを尤も善とて吾兵の歩砲丸にや大眼を
 打たれ捕えられぬ者四人あやつたりせ子マルカ
 國の醫士の厚き介抱よつらりて居所を移しを其
 所ハキアテて直に療治を加つたれを傷愈えつ
 恙なく歸らるるを得たり
只二人ハ傷支保つた實よ
 短くをりしつた
 彼國の賜をらつた我等も亦彼國の兵卒の同傷

を受一者二人を療して纜其賜もの報ひは
 大腿骨折ハたしく綱帶を嚴重に施すといつと
 も高低ある地を車輿に載せて遠く運ひゆれば
 必ず害あり兩軍相臨し戦ふ時より傷者の
 出来さめれん博愛の心をて敵味方の別ちなく
 其場にちりし屋に入きて深切に療治しやらハ
 司命の職も耻ぢずとらふ

○治法をいふた腫りの出来らるる者より骨の折
 る一所を整ふる術を試むつ一但一是を助くる
 にはホロルホルムを嗅きて筋肉を弛ゆるを善

とす創口あるものといつて是は指を挿入し
 て永く探るを益あり傷支を保ち得つるあり見
 ちある者にハ先づ傷支の位置をて度と適
 る一なるを第一とす其法ハ傷支の内外両側
 に各々長さ蒲團を置き其外より木より作
 り夾を當て條布より綁住む若傷支を揺らさ
 らむらむるよを木にて足形に作り物を全足
 に當てて木を綁住む又度に適ひ枕を蒲團
 より作り是に倚らむらむるをよ一但綱帶より
 腿より下を密に纏絡めを創を害すべから故

しょうりーうらす凡を編帶を行ふはを大に慎みて
 意を注ぎ傷支を壓すつうらす又揚くつうらす
 ちれを換ふるはを猶夾を取去るつうらす若止
 心ちとちく去るはを復ひ舊の所より置きて編帶
 を行ふつー其外ハ消焮方を厳しく行ふつー焮
 衝の時幸に過さぬハ夾の數を増して數枚置
 き數頭巾より是を綁住むつー若傷支を伸し
 たる者ハ人のちとち臺を作して其上に安放す
 つー若化膿甚しく且ちちを傷支を伸
 して保らぬる曲アーちうりて強直をいぢる治
 せんを跛行をちすの患を遺ちそ

ところ處置にのち手を盡く療すく凡を傷支の
 筋肉の縮力にちうりて脚を半をんと曲け枕を
 およそ跣の位置を少くも變へゆるやうにま
 置きぬる腐骨の破片ハおのつうら滑脱オウツとて生
 骨相癒え合ふそのちり大抵八日のうちには傷
 者快復の萌くを顯るまへつー

膝較骨砲傷

○砲丸を膝較に打入ちち者ハ大抵指を創内に
 挿入ちち探ちハ其碎々つる状を知りわちち乃
 ち立とちちに其所より切斷つるち他術あら

く内れと砲丸の大腿骨断骨の突起に中アんと
 者ハ其所を凹すの有無れらるらす迂路を開
 きて他所に入めらるる故と志れらるるを指
 を挿して探らるる骨衣の放るるをわらわぬ
 まとも 瑕裂の他所に及ぶとを識せらるる
 のちりかく迂路を作して思ひより内れに砲
 丸の止まらるるを他所の砲傷とをいふ
 曾て見らるる所より予傷所より隔たるる所の皮肉
 を割て砲丸を取出せしとすくちららす膜
 蓋にちららるる所に打ちちらるるに骨の三分の一を

めくアて皮肉をとらてすく膝窩におりてこれ
 を割抜るるる單膜を横らに打貫るる創も亦其
 口小く較汁たららに漏るるを識せらるる
 たらるる者も

○膝較の砲傷ハ防炊方を厳しく行ふといつても
 炊衝漸く起て化膿又従て生じて數日止す
 るを予ら屢々實驗する所より其上異物其所に
 滯るるを創内必ず化膿を生じて切斷術を行ふ
 あり内れを救ひらるる症あり實驗によりて習
 らに膝較の砲傷其口を開らるる切斷術に及らるる

して治する事とあを予又思ふにあらざる大腿
骨に鋸断術を行ひしうと治するそのすくまけ
きを一術を巧みてこれを試うたり乃ち一壯士
の砲丸は膝較と膝蓋とを共に外の方より破
られて三寸をうやも深くうへるとうへに向
ひて打込まれたる外突起の一とくうり碎々々
も深き溝のうたちとありぬ初ハ膝較破まぐ口
を哆きめるとりぬ出とを疑ふしうれともや
てたしうに知まされを創路を割きて碎骨を
悉く去り兩側靱帯と其表の皮肉とを重めて各

々二寸をうやも割開きたり此所より較汁のや
り膿に化せしそのを多く流さいて忽ち快
復の萌しあらる膿汁日々に減し創口日あ
すして飲るべくなりたるに肺瘍を病きて死せ
る誠に惜むべき事なり

○膝較一所の鋸断術ハ予ハ行ハしやき是幾寸を
うや鋸を断ちてよりのをせんや多くとをあら
く又此術を行ひても良効あるくさとの覺え所
きをたり

脚砲傷

石丸言 卷二 三十九 漢書 卷九十八

○断骨の上部と真横と中とたる砲傷ハ其骨の上
下に瑕裂をいたらざるそのを予ハ此傷者二
人を見たり皆皮肉廣く化膿し其れを所々を割
開きて膿を漏れやましく其れを惡症を起さず
して愈えたり若砲丸断骨の上部に嵌留すれを
丸拵（丸拵）にて拵し出すべし其れを拵しつたすに
しして出てふたふたのハ鋭き鑿をそて骨を穿
ちて掘り出たすべし

○脚の両骨即ち断骨と輔腿骨とを共に傷つて片
々に碎りて其所より鋸を断ぎてを救ひしべし

されとも傷者を遠方へ送らすべし療すれハ幸に
治すべしそのすべし

○断骨の中央あるを其下部を前より打貫れよ
しを斜に打貫りて骨肉を縦てに多く破りぬる
そのを共よ凶症とて鋸断術を行ふよしありしを
命を救ひしべし其の傷ハ思ひし所より遠き所ま
て瑕裂の及ひぬるそのを化膿又蔓延（蔓延）せしめて
膿毒病の懼甚しとすされその傷所を生骨よ
し鋸を断りて破骨を取出去るを恙なく治すべ
し事ハ千八百四十八年と九年の戦ひに予ハ親

包蔵論 卷二 四十一 齊報 請書 載 版

證す所あり若甘して待効方を行ひ自然に
 せしむるを多くハ膿毒病まで死するそのあり
 故に予ハ斷骨の碎々ハ所廣きものに早く鋸断
 術を行ふの意あり且つ膿毒の續き發するを防ぐ
 ためあり千八百四十九年の役に之傷者を遠方へ
 送りしれを傷後一晝夜の間ハ鋸断術を行ひて
 のまきするさの故にちの治法の法となすつさ
 を得たり若此術を早く行ひて其驗ハ
 て待効方ハ勝るべく遠くならんと其覺ゆれ
 ○外骨輔腿骨の下端距の砲傷ハ惡症を引出す

してよく治すその多し尋常の綿帶を行ひ
 骨を化膿に任せて自ら落るを静かに待つ
 脚の諸靱帯の砲傷ハ各々其れに應ずる治
 せん大抵尋常合併骨傷篇他日翻譯してに
 しめる方に異なり一とせしめ其篇に倣
 して處置す
 ○両脚骨斷骨輔腿骨とて折るに之をハ
 ル名の夾板を善とす若斷骨の之傷ハ之の
 を脚の外方に厚紙にて作り夾を當て夾と脚
 との間隙を綿をせしめて其不平らなる

て縋帶せしむ

○砲丸横にきりて内髀と外髀を擦過りてそ
に傷ふ者にそ切断術決して要をす我屢々見
る所のそのを皆跗較の強直を遺して治せり
ゆれとそ筋骨の下端を砲丸より傷ひ碎さる
者ハ皆鋸断術を主治とす

跗骨砲傷

○此傷ハ破裂丸の一片にて打りしその尤も危
予診たりし者ハ悉く壊死虚勞破傷風を發し
死せり歩砲丸にて打りしものをやゝ輕

を起さずして治すフレールブルツ此にて予患立

ぎし者そ砲丸を踵より跗背に打りし者ハ
路の中より跗骨と骰子骨とハ悉く碎り
片より傷處を覆ひぬるまで殆と十四日の間息
を待ち乃ち焔衝重に消えぬハ化膿の出来ぬ
を待ち碎骨を取去るに跗骨と骰子骨ハ大抵
つさぬやうに愈むに其形ち舊の如くにて見
る所少くも初較汁を漏すといふと跗骨
の強直を遺す事少く戰場にては常に必き水あり
とをとりやうに治す事天幸とて治しぬる事

のを手本とハナシ、別ニ予距骨と跟骨とを
 破リて砲丸の骨内にとどまらざるをシメ、人の術に
 倣ふて内髌の一部を鋸で断ち療むるに善く治せ
 ば又跟骨を碎きて其勢ひ餘り砲丸艇様骨に止ま
 りありざる者も同術を用ゐて内髌の一部を鋸で
 断つ且つ骺骨頭の軟骨を削り去り、多量に膿毒を
 病みて死する後に察するに軟骨を削り去るによ
 りて膿毒病を促さず、そのなるべし
 ○擦過傷（まじりきず）と跟骨を露し、或ハ其れを破り、
 皆手輕き療法にてよく治す、後跗骨を歩

砲にて傷ひたる者も甚々危うらす砲丸を掛き
 去れを破骨ありしやすして治する事と意外
 に出つるをり上等醫官フンク（名）の療治以後跗
 の内は砲丸を打入り、期年餘りも出て、表
 此割愈えり、纜は小さき瘻孔を遺す、その診
 て砲丸のありしを探り得、その皮肉を割開
 ちれを取去り、其れあり

○予の診たり、前跗の砲傷數多し、れを死す
 者、纜に一人の、其人素より瘻歴質あり、傷を受
 け、初めに治療より、その砲丸全く骨を貫き

てめも出肉中より止まらざる者誤を認めて
肉中に在と思ひて探で求むる時刻長くして遂
に前跗の第二列骨頭の手にかえりて砲丸
と思ひ其所を割開きたるより粗暴の處置に
てを死するも宜からずや又予も此れに似たり
迷つる處置を疎較を行つる者を見たり疎較
割口をあやふれを輔腿骨頭を砲丸と誤り認め
其所を割開きたる其後予傷所を熟く見れ砲
丸の入路と出路の両口歴然として見えれば
よを一口ハ見えたりと云ふは也

○前跗の一骨或ハ衆骨の砲傷ハ皆治しやま多
くを外科術要す 切断せしめてたやすく治す
れえより此傷の疼にあやふ堪ふたき者ハ懼れ
ず阿片を與へて早く温布を貼するに志す

斯篤魯默兒砲傷論卷二終

慶應元乙丑五月刻成

發行書賈

江戸日本橋通三丁目

山城屋佐兵衛

同 大門通難波町

嶋村屋利助



